

納棺・湯灌における死別ケアの探索的研究

—湯灌士への質的調査から—

永 山 彩 花*

I. はじめに

1. 研究背景

かつて、葬送儀礼は地域・日常の中にあるものだった。関沢（2003）によると、葬送儀礼は「その死者にとって3種類の立場の人々によって執り行われてきた」という。それは「死者の家族や親族等血縁の関係者、葬式組や講中などと呼ばれる近隣の地縁の関係者、そして僧侶等葬儀の職能者つまり無縁の立場の人々」であった。直接遺体に触れるのは「血縁者」及び「地縁の関係者」であり、実務的な部分はこの立場の人々が担っていた。ところが近代、1990年代から2000年代に向かって、「湯灌や入棺は血縁の関係者から病院関係者もしくは葬儀社職員へ、装具作りは地縁の関係者から葬儀社へ」という急激な変化がおこっている」という。こうした日本の葬送文化の変化について、内藤（2013）は「古代に行われていた儀礼である『殯^{もがり}』では、死者を本葬するまでの長い期間、棺に遺体を仮安置し、別れを惜しみ、死者の霊魂を畏れ慰め、死者の復活を願いつつ、遺体の物理的変化を確認することにより、死者の最終的な『死』を認識したが、現代社会において、それら『死』の物質変化に触れる機会はなくなってしまった。病院から葬儀社への搬送、葬儀社での通夜・葬儀、火葬場での処理、果てはグリーンケアまでもがアウトソーシング可能なものとなった²⁾』としている。

死が日常から切り離されるようになり、親近者の手を離れ、地域を離れることにより、葬送儀礼

は変化した。その1つとして、儀礼の省略化の進行がある。伝統的な魔除けにあった、「死者の肉体と霊魂を魔物から守る意味」と「生者の生命力を死霊や死穢から守る意味」の2種類のうち、1960年代から1990年代にかけて「生者の生命力を死霊や死穢から守る意味」の儀礼の省略化が急速に進んでいることが明らかになっている。この背景については、「死者は不気味な死骸と死霊となるのではなく親愛なる死者のまま葬儀の場につづけている」というように、日本人の死生観の変化、とりわけ生者から死者への受け止め方の変化が一因として考えられている³⁾。

近代日本の死者の捉え方ならびに死生観については、様々な流行からも窺い知ることができよう。2006年から2007年にかけては秋川雅史の歌う『千の風になって』が大ヒットし、2012年には、「人生の最期を自分の望むように自分で準備すること」を表す「終活」という言葉が、流行語大賞のトップテン入りを果たした。『千の風になって』は、死者が「千の風」になって空を吹き渡り、生者を見守っているという歌詞である。「終活」という言葉自体は2009年から存在し、2010年には『現代用語の基礎知識』にも掲載されている⁴⁾。2008年には、遺体を清め死出の旅路への手伝いをする業者を主人公として描いた映画『おくりびと』が公開され、様々な映画賞を受賞した。学術的、医学的分野では、1970年代に「日本死の臨床研究会」が立ち上げられたり、ホスピスが紹介されるなどして、死生観への関心が高まっていた⁵⁾。

このようにして、一度遠ざかっていた「死」に

ついて、その反動として再考する動きが強まっていることがいえる。病院死の増加から、ターミナルケアやホスピスケア、エンゼルケア・エンゼルメイクへの関心の高まりなども強く見られ、論文検索サイト「CiNii」⁶⁾でそれぞれキーワード検索を行ってみると、「ターミナルケア」は2411件、「ホスピス」が1984件、「エンゼルケア」が84件、「エンゼルメイク」が69件ヒットした。遺族へのケアについても、「遺族ケア」は100件、「グリーフケア」は479件見つけることができる。

しかしながら、前者は「病院の中でのケア」であり、後者は「遺族などへの悲しみのケア」についての論文である。病院から葬儀までを繋ぐ、「おくりびと」については映画以降注目されているとはいえない現状である。「湯灌」や「納棺」をキーワードに出てくる論文はそれぞれ18件、24件と極端に少ない。その上、「湯灌」は本研究で示す「湯灌」と異なる分野の用語も含まれていたため、それらを除けば13件にまで減ってしまう。加えて、習俗や民俗儀礼としての湯灌や看護師の行う湯灌ではなく、葬儀業界に従事する専門職能者としての「納棺士／湯灌士」を対象とした研究は、殆ど見られない。

「死」について人々の興味・関心が高まっていること、そして死者を穢れとせず生前との結びつきを強く感じるようになってきている現代日本の背景の中、肉体との最後の別れの場を支える湯灌士の実態を調査することで、葬儀社主導が当たり前になっているこれから先の葬儀、死への向き合い方を考えることは重要である。

以上をふまえ、本研究では湯灌士の意識調査から、職務へ対する意識や、故人・遺族への対応を明らかにし、死生観やグリーフケアなどにどのような示唆を得ることができるのか、見解を述べる。

2 用語の定義

納棺：死体を棺に納めること。本研究では、棺に納める前の清拭から納めた後の枕飾りまでを含める。

湯灌：入棺する前に死者の体を湯で洗うこと⁷⁾。

湯灌士：「湯灌『師』」の記述もあるが、確定している名称がない。本研究では納棺・湯灌の業務

を行う専門職者をA社での表記に倣い「湯灌士」と定義する。

エンバーミング：遺体の全身を消毒・洗浄した後、顔を整え、動脈から固定液を注入、静脈から血液を排出し、交換する。このことにより腐敗を止め、体内の病原菌を殺菌。必要に応じて修復し、最後に化粧を施す。遺体との対面を生前と同じ姿で実現する⁸⁾。

II. 研究方法

1. 対象と手続き

筆者のフィールドワーク先である湯灌サービス会社A社で納棺士／湯灌士（以下、湯灌士）として勤務するスタッフ7名に対し、インタビュー調査を実施した。データ収集は、半構造的質問項目に基づいて面接調査を実施した。

基本属性、勤務歴、就職のきっかけ、就職前後の（「湯灌士」という仕事に対する）イメージの変化、仕事のやりがい及びつらいこと、ストレス対処法、家族や知人からの反応や声掛け、遺族と接する時に気をつけていること、印象に残っている「良い」ケース・「悪い」ケース、他の湯灌士や湯灌業者について聞きたいこと・知りたいこと、エンバーミングについての考え、葬儀業界・湯灌業界の課題について自由に語ってもらい、それを研究者が聞きとった。面接はA社事務所内で行い、1人60分程度行った。インタビューの内容は録音せず、研究者がノートに書き取って記録した。

2. データ収集期間

データ収集期間は2014年8月～11月である。

3. 分析方法

収集したデータを元に、対象者間の比較によって意味内容を検討し、事例検討的に分析を行った。

4. 倫理的配慮

対象者へは、研究の概要、研究への参加・協力の自由意志と拒否権、プライバシー・個人情報の保護、研究に参加することは参加者の全く自発的

な行為であるという点を口頭で明確に伝えた。インタビューの内容は、対象者の同意を得て研究者がノートに書き取って記録した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 対象者の背景

対象者は7名（男性2名、女性5名）、平均年齢は40.7才（SD=5.4）であった。平均勤務年数は10.1年（SD=4.9）であった（表1）。

表1 インタビューリスト

対象者	性別	年齢	湯灌士歴
A	女	36	6年（休職期間3ヶ月）
B	男	39	18年
C	男	41	9～10年
D	女	33	3年（休職期間3年）
E	女	44	7年
F	女	41	12年（休職期間3年）
G	女	51	15年

2. 聞き取り調査より

1) 就職のきっかけ

湯灌士に就職した理由について、以下の回答が得られた。

表2-1 就職のきっかけ

- A：アルバイト募集雑誌でたまたま目についた。『こんな仕事もあるのか』と感じたが、興味は無かった。後日、別のアルバイト募集雑誌を開いた時も同じ求人が目止まったので、縁があるように思い応募した。
- B：なろうと思ってなったわけではない。福祉の求人を探していた時、移動入浴の仕事と聞いて入った会社が湯灌の会社だった。福祉の仕事では無かったが（就職する）半年前に祖母の湯灌を見ていたので、“アリ”かと思って、そのまま働くことにした。
- C：仕事をするのが嫌だったが、働かざるを得なくなりました。自分に何かできることがあるとは思っていませんでした。やりたいこともできることもないが、人の役に立ちたいと考え、積極的に能力を活かすことはできないが、人がやりたがらない、嫌がること、やらないことで役に立ちたいと思った。
- D：働いたことがなく、働く気も無かった。「湯灌」を知って、どうすればこの仕事出来るのか考え、電話をした。そこで紹介してもらった。昔から生きている人間が苦手という部分があった。遺体には昔から興味があったし、生きている人間と違い寝てい

るからいけると思った。

E：前職の派遣契約が切れたため、転職活動をしていた。前職は事務だったので、それとは別の、一生できることを探した。1年以上考えてやってみようと思った。

F：祖父の湯灌を見たことがあった。当時は、「こんな仕事もあるんだ」と感じたが、それを見て湯灌士になりたいと思ったわけではない。それまで（就職する前）は医療事務の仕事をしていて、外部委託をすることになり、今後の仕事をどうしようかと考えていた。その時、求人を見つけて応募した。24歳の時に祖父の湯灌を見ていたが、湯灌士として働くまでは2年掛かった。

G：介護の仕事をしていて、当時は買い物くらいしか頼まれず、午後の仕事はほとんどなかった。その時間を使って働きたいと思っていた時、ちょうど12時からの湯灌のパートを募集していた。家からの距離、業務時間が自分に都合の良い条件と合致していた。

Cさんは、湯灌を「人がやりたがらない仕事」だから、やりたいと考えて選択していた。Eさんは、手に職をつけることを考え、Dさんは、「生きている人間が苦手」「遺体には昔から興味があった」のように、初めから業務に興味を持って就職をしている。一方で、「たまたま目についた」（A）や「なろうと思ってなったわけではない」（B）のように、偶然湯灌士になったケースや、勤務時間が「自分に都合の良い」（G）からという理由で選択したケースもある。

転職を機に再就職先として考えたEさん、Fさんは、入職まで1～2年程、考える時間を要している。これは、Cさんの回答にも見られるように「人がやりたがらない仕事」であることや、そういった考えが基での差別・偏見などについて、時間を掛けて考える必要があったことが示されている。Aさんは当初「興味がなかった」としながらも「縁」を感じての就職であるため、求人を見てから就職までの時間が掛かっている点は共通しながら、その時間の持つ意味に差異が見られる。Dさんは湯灌士になりたいという思いを持っていたが、残る5名は積極的に「湯灌士」という職を求めたというよりは、偶然的な重なりや条件の合致、自身の置かれた環境の変化に迫られた結果といった理由によるものだった。就職時期はいずれも映画『おくりびと』発表以前であるため、

一般認知度も低い。そのため、上述のような偶然が無ければ、湯灌士を知る機会は多くなかったと考えられる。

2) 就職前のイメージ

就職する以前、湯灌・納棺に対しどのようなイメージを抱いていたかについて、以下の回答を得た。

表 2-2 就職前のイメージ

-
- A: 何も知らなかったので、分からない。
 B: これといったイメージはない。祖母の湯灌を見ていたが、これといったイメージを持つことはなかった
 C: 求人票に「亡くなった人をお風呂に入れるサービスです」と書いてあったのを見ていた。「マジか」と思った。
 D: 全くなし。遺体への興味はあったので、ただ「仕事」という考え。
 E: 湯灌についての本は読んでいた。介護のようなイメージ。その前は、死体がホルマリン漬けにされているイメージを持っていた。
 F: 全くなし。分からない。
 G: 見たことがなく、知らなかった。介護の延長だと思っていた。介護現場で働いていたので、移動入浴は身近に見ていた。
-

Cさんは、求人票の業務内容を事前に見て、驚いたことを述べた。また、Eさんは事前に湯灌についての書籍で想像はしていたというが、本を読む以前は「ホルマリン漬け」のイメージがあったという。この「ホルマリン漬け」とは都市伝説⁹⁾の1つで、「大学の医学部では解剖用の遺体をホルマリンのプールに漬けていて、浮いてくる死体を棒で突いて沈める高額のアルバイトがある」といったもので、実際の湯灌とはかけ離れたイメージを持っていたことが受け取れる。Aさんは湯灌について知らなかったため、イメージ自体を持つに至らず、そのため「分からない」と回答している。「祖父の湯灌を見たことがある」と回答したFさんも、どのような仕事かは知らなかった。Fさんと同様に、祖母の湯灌を見たことがあるBさんも「これといったイメージはない」と述べた。Gさんは介護現場の経験から、「知らなかった」としながらも、介護での移動入浴と近いものを想像していた。

具体的なイメージとして挙げられたものは「介

護のようなもの」であったが、殆どの場合、湯灌・納棺がどのようなものかは知らないことが多かった。また、湯灌を見た経験があっても、それが仕事としてのイメージには繋がっていないと考えられる。

3) 就職後のイメージ

就職後、実際に働いてみてどのようなイメージを持ったかについて、以下の回答を得た。

表 2-3 就職後のイメージ

-
- A: 出来るのか、という不安。就職後、研修中は綺麗な故人だった。研修後にどんなケースに当たるか考えると、楽しいなどという感情より不安しかなかった。
 B: 祖母の湯灌の際、身内も自分も嬉しく感じた。感謝の気持ちを持った。人の役に立てるいい仕事で、やりがいがある。
 C: 段々変化した。始めは単純に学びながらイメージを掴んで、2年くらいで仕事を分かった気になり、面白くなくなった。会社を移るにあたり、これまでと役割が変わったことで、知らないこと・できないことがたくさんあることに気づいて面白くなってきた。
 D: 半年くらいで好きになれた。それまでは遅刻したりてんやわんや。半年経って、責任感などが生まれ、遺体を綺麗にすることを嬉しく感じるようになった。遺族も、元気な姿に近づけられて嬉しく感じてくれるので、こういう仕事なのかと理解した。
 E: 介護みたいだと感じた。イメージの落差はあまりない。
 F: 前の会社では、特に何も考えることなく淡々と業務としてこなすばかりだった。
 G: 仕事内容を知った後も、「あんな感じか」という印象。特に変化はない。
-

就職前後での変化を述べたのはCさん、Dさん、Fさんであった。介護をイメージしていたEさん、Gさんはそれぞれ、「イメージの落差はあまりない」「特に変化はない」と回答した。Cさんは、働き始めてからイメージが変化していく様子を語っているが、A社以前に勤務していた湯灌サービス会社とA社とで担う役割が変化したことが、その要因として挙げられた。祖母の湯灌に対し、「これといったイメージはない」としていたBさんは、「身内も自分も嬉しく感じた」ことで、湯灌士への「感謝の気持ち」や「いい仕事」といった受け止め方の変化を表出している。「分からない」と回答していたAさんは、知らな

いことや初めてのことへの「不安」について語った。Dさんは遺体への興味はあったが、仕事を理解するまでには半年ほどを要したという。遺体を綺麗にすること、またそのことで遺族に喜んでもらえることに嬉しさを感じたことで、仕事への考えが変わったとした。

湯灌士の仕事内容を詳しく知っていたスタッフは少ないが、実際の仕事を知って驚いたり、落胆したりするような回答は無かった。Aさんは「自分でできるのか」という不安があったというが、仕事としては受け止めている。どのスタッフにおいても、抵抗感や嫌悪感のような負のイメージは見られなかった。

4) 仕事のやりがい

湯灌・納棺の仕事の中で、どのようなやりがいをを感じるかについて、以下の回答を得た。

表 2-4 仕事のやりがい

-
- A: 「ありがとう」と直接言われることはあるが、手紙をもらったことがあり、とても嬉しく、泣きそうになった。
- B: 喜んでもらえること、「ありがとう」と言ってもらえるところ。直にその思いを感じられる。
- C: 自分の気づき、提案でご家族の要望をより多く叶えられたかなと思えたとき。
- D: 遺体を綺麗にできること。遺族から、涙ながらの「ありがとう」という言葉をもらえること。
- E: プレッシャーが多い現場で、自信がなく、動揺がある時に無事に終わらせられると、色々な収穫がある。故人の状態を受け入れる遺族に立ち会ったり、業者の要望に答えられた時にやりがいをを感じる。人情的な部分についてはあまりない。
- F: 遺族から、本心からの「ありがとう」という言葉をもらえること。上っ面だけではない言葉をもらえること。
- G: 人と接する仕事で、答えがないのが面白い。探求し続ける、到達点が見えないというのが良い。
-

遺族からの感謝の言葉がやりがいとして挙げられた。最期の時に語られる「ありがとう」にやりがいが込められているという内容がよく語られている。「上っ面だけではない」(F)のように、家族の死に際して口にはされる感謝の気持ちは、本心から出てきたものだと感じられることが理由として述べられた。またAさんは、直接のやり取りではなく、手紙を通してそういった思いを伝えら

れた時「泣きそうになった」と述べた。Cさんは、自分の気づきが遺族の要望に添うことができた時、Eさんも「業者の要望」に答えられた時など、仕事の達成感といった部分もまたやりがいに繋がっていると捉えられる。Gさんは全般的に、「答えのない仕事」としての面白さを感じていた。それぞれにやりがいをを感じる部分は異なるが、人生の最期の「ありがとう」に含まれる特別な思いを受け取っていることが明らかになった。

5) 仕事でつらいこと

仕事をしている上で、つらいと感じることについては以下の回答を得た。

表 2-5 仕事でつらいこと

-
- A: 若い故人の納棺をすること。家族の思いに添うことができなかったこと。出来る限りのことはしたし、どうすることもできない・仕方がないと言われたが、自分の中の限界を感じる。
- B: 自分ではどうすることも出来ない故人を前にした時の、遺族の悲しげな「ありがとう」という言葉。もっと、という気持ちは双方にあるが、限界を皆が分かっている。知識と技術が役に立たない時も辛い。
- C: 自分の力量の無さ、葬儀社の意向などから、ご家族に説得するようなことを言っている時。
- D: ブランクがあるので、それを埋めるのが大変。以前は免許もなく、車の運転もできなかった。自分の力不足を感じる時は辛い。
- E: やったことが家族にとっても出来ないこと、辛い気持ちを拭うことに繋がらなかった時。
- F: つらいことはない。葛藤することはある。考えることはあるが、それについて辛いと感じてはいない。
- G: 自分がしてあげたいことのイメージはあるのに、それをできるだけ技術や知識が足りないこと。
-

「自身の力量不足」についてつらいと感じると4名が回答した。Aさん、Bさんは、「どうすることもできない」状態の故人を前に、できることが無かった時を挙げた。Gさんも、故人に「してあげたいこと」が出来ないことがつらいと語った。Cさんは、そうした力量不足などが原因で「ご家族に説得するようなこと」を言うことになるのがつらいとした。休職期間が3年あったDさんは、ブランクを埋めることが大変であると述べた。Eさんは、「出来なかったこと」に対してではなく、「自分がしたこと」が家族にとって良

い影響にならなかった時につらく感じていた。また A さんは、「若い故人の納棺」を挙げていた。一方、F さんは「つらい」という感覚ではなく、「葛藤することはある」と回答した。

遺族にとって、また故人にとって、したいこと・してあげたいと思うことができなかった時につらいという回答が目立った。A 社は、例えば道具が足りずに遺族の思いに応えられなかったことがあれば、次回以降それに対応ができるよう道具を揃えたり、縫合や注射等で遺体の損壊をより良く修復していくための技術や知識を取り入れたりしながら、適宜環境を整えている。そのような基盤でありながらも、まだ足りないにつらく感じていることが明らかになった。1 件ずつの個別性が高い湯灌・納棺においては、様々な分野の知識や技術が必要とされる。その都度必要とされる内容が少しずつ変わってくるため、力不足に感じられる。

6) ストレス対処法

仕事でのストレスについて、どのように対処しているか、以下の回答を得た。

表 2-6 ストレス対処法

A:	上司や同僚への相談をしている。
B:	病気になるまで耐える。発散は特にしていない。強いて言うなら飲酒。
C:	ハードな仕事が続くとストレスが溜まり、飲酒で対処している。気分が落ちている時、仕事に來ると元気がもらえる。
D:	同じことを二度としないように気をつける。次に活かすよう心がけている。活かした時は、気持ちがあすつとする。
E:	考え続けること。考えて解決できなかったら仕事仲間話す。それでも分からないことは本などで補う。
F:	湯灌士「だから」という対処法は無いと思う。どんな仕事をしていても同じ。自殺の遺体が続いたり、あまり綺麗じゃない状態の遺体が続くとストレスが溜まることはある。そういう時は、家に帰って好きなことをして気晴らしをする。
G:	スタッフと話し合い、共有すること。子供と共有したいと思っていたが、幼かった頃は断られた。成人してからは聞いてもらえるようになった。何気ない話が助けになることが大きい。それが無ければ辞めていたかもしれない。

男性 2 名は、ストレス対処に「飲酒」を挙げ

た。D さんは「次に活かすよう心がける」など仕事への向き合い方を見直し、E さんは「考え続ける」ことで、また F さんは「好きなことをして気晴らし」で対処しており、それぞれの力や趣味などを用いた解決方法を取っていた。A さん、G さんは上司や同僚など湯灌士スタッフに悩みを相談するといった関わりで対処していた。飲酒での対処を挙げた C さんは、分かち合いのような表現は使っていないものの「仕事に來ると元気がもらえる」と同僚の存在を評価し、「考え続ける」としていた E さんも、「考えて解決できなかったら」仕事仲間と共有すると述べた。

会議や分かち合いの時間のようなものを制度として設けてはいないが、日常の中でのやり取りや事務所の雰囲気など、日ごろからの人間関係の上にサポートが成り立っていると考えられる。

7) 家族や知人からの反応や声掛け

湯灌士という職に就くにあたって、家族・知人などからどのような反応や声掛けをされたかについて、以下の回答を得た。

表 2-7 家族や知人からの反応や声掛け

A:	家族は「そんな仕事もあるのか」と賛成してくれられた。一方で、当時 5~6 歳だった自分の子供に対し、友人から「職業が原因で苛められるかもしれない」と忠告を受け、不安にもなった。すごく悩んだが、子供に「こんな仕事をしようと思っている」と説明し、相談をすると「素敵な仕事だね」と言ってもらえた。苛められるかもしれないことも伝えると、子供自身が「素敵」だと思っているから「言い返せる」と答え、それに後押しされたところがある。今でも子供が「今日はどうな仕事だったの」と尋ねてくる。愚痴を言っても子供が慰めてくれる。例えば、ものすごく状態が悪いご遺体の修復をした時、ご遺族は満足してくれているようだったが、「あれでよかったのか」と悩んだ。子供は「そんな故人さんもいるんだね。ママを呼んだ、選んだんじゃないの」と返してくれた。
B:	母方の親戚に絶縁された。友人は理解があったが、身内の反発は大きかった。
C:	自分自身の選択については、自分の好きな・やりたいことしかしないので、周りの反応は気にしたことがない。家族は「あなたは何を言っても聞かないだろう」といった感じ。友人も、「そうなんだ」といった感じ。死を忌避する傾向のある友人もいるが、特に何も言われたことはない。本心は分からない。

- D:「働く」という選択をしたことに対して大喜びされた。仕事内容についての反対は無かったが、身体が強いことに対しては心配された。
- E:友人は驚きつつ、応援してくれた。父親は、家族を亡くした時に男の湯灌士を見たことがあった。「そんな仕事だぞ、死んだ人に対しての仕事を本当にやるのか」と心配された。ホームページや本で調べて「やりたい」と感じたこと、仕事内容を理解していることを伝えたら応援してくれた。母親は、葬儀社社員になると思っていたので湯灌士だったことに驚いたが、否定はしなかった。心配はしていた。
- F:家族からは特に否定も肯定もなし。友人にもそんなに伝えてはいないが、知っている相手も「凄いね」「私にはできない」といった当り障りのない反応。親戚の一部からは「どうしてわざわざそんな仕事をするのか」と言われた。昔の人なので感覚が古いかもしれない。夫の親戚からは批判されたが、実際に親族の湯灌をする姿を見てやっと認められた感じがあった。
- G:両親は大反対。仕事内容をよく分かっていなかったのだと思う。友人も「よくやるね」といった反応。両親は徐々に、自分(Gさん自身)の生活や表情を見て、充実しているのを理解してくれた。1~2年で分かってくれた。とはいえ、仕事量が多く朝晩不規則に出ることもあるので、そういった部分で「そんな仕事」とは言われた。祖母が亡くなったとき、一緒に作業をした時に本当に認めてくれたように思う。友人も、友人の母の納棺を何人も行い、その現場を見てもらってから何も言われなくなった。偏見は減ったと思う。「おくりびと」の映画は大きい。あれで良いイメージを持ってくれたと思う。家族葬、「おくりびと」の後押しがあった。

差別や偏見と取れる反応としては、Aさんの「職業が原因で苛められるかもしれない」といったものや、Bさんの「親戚に絶縁された」、Fさんの「夫の親戚からは批判された」、Gさんの「両親は大反対」が見られる。Eさんは父親に「そんな仕事」と心配されたことと述べているが、仕事内容を説明することで理解を得られたという。Aさんは友人からの忠告に対し、子供への説明を行い、子供からの承認・後押しが大きなサポートになっていると考えられる。Cさん、Dさんは仕事内容への否定的な反応は無く、それぞれの性格や状況から比較的受け入れられていたと捉えることができる。Fさん、Gさんは反対や批判のあと、否定的感情を持っていた当人の親族の湯灌を担当することで、「認めてもらう」ことができたと言った。

Gさんの語りにあるように、『おくりびと』以

後はイメージの好転があったと考えられるが、それ以前に就職していたスタッフの人々は、少なくとも肯定的に見られることはなかったといえる。しかしながら、配偶者や子供といった家族からの否定は見られず、特にAさんの子供のように若い世代は抵抗も少なく、肯定的な視点を持っている可能性が示唆された。

8) 遺族と接する時に気をつけていること

湯灌・納棺時に遺族と接する際、どのようなことに気をつけているかについて、以下の回答を得た。

表 2-8 遺族と接する時に気をつけていること

- A:言葉遣い。敬語の用法についてと、言葉の選び方について。
- B:意見を押し付けないこと、第一印象を悪く見られないようにする(清潔感のある服装や、丁寧な所作など)こと。
- C:遺族の状況、心理と一体化すること。遺族目線で考える。葬儀社とも普段からコミュニケーションをとるようにしている。
- D:家族による。場の空気に合わせるようにしている。「大往生」「自殺」などの言葉には気を遣う・空気を読む。全く喋らないこともある。掛ける言葉がないこともある。遺族が何を求めているのか考えて接する。全く喋らなかつた遺族も声掛けを機に和らぐこともある。遺族をよく見、故人へ無礼の無いよう気を配る。
- E:言葉がけと、雰囲気作り。目が合った時、すぐには話しかけず観察をする。家族の気が落ちている時なので、手際よく話をしたり聞くのではなく、わざとゆっくり話したり、話し始めるのを待つ。焦りを感じられたり、前に出すぎて相手に引かれないうように気を配る。葬儀業者にも同様に接する。
- F:その時々で異なる。家族が故人に「してあげたい」ことを取りこぼさないように気をつける。出来る・出来ないの別はともかく、家族が「こうしてあげたい」ということをなるべく出来るように。
- G:遺族が気づいていないことを掬い上げる。遺族は湯灌師がどれだけのサービスを出せるか知らない。亡くなった方との関係性などを、副葬品や自宅の飾り(写真や絵)などから探り、接点を見つける。

サービス業としての振る舞い方は当然ながら、「わざとゆっくり話したり」(E)のように、意気消沈している遺族への対応だからこそと思えるようなことも述べられた。また、「大往生」は主観的判断による言葉であるから、遺族とのズレがある恐れがあり、「自殺」も遺族がその言葉をどの

ように受け止めるかの幅があると考えられる言葉であるから、「気を遣う」(D)という。言語的コミュニケーションだけでなく、「清潔感のある服装」(B)、「遺族の状況、心理と一体化する」(C)、「場の空気に合わせる」(D)、「雰囲気作り」(E)など非言語コミュニケーションに対する気配りには特に注意していると考えられる。

Fさん、Gさんからは「遺族の思いを汲み取る」ことが共通して語られた。遺族が思う以上に湯灌士の出来ることは多いので、遺族が出来ないと思っていることや、口に出していないが望んでいることをなるべく引き出し、それに添うことが重要だと考えられる。

9) 印象に残っている「良い」ケース

これまでに担当してきたケースの中で、それぞれの主観で「良かった」と思うケースについて以下の回答を得た。

表 2-9 印象に残っている「良い」ケース

- A: 湯灌に立ち会っていない遺族から手紙をもらったこと。最初(筆者注: 葬儀社から来た状態の遺体)の顔から綺麗にして白装束へ着替えを行った。娘が立ち会って、密葬だった。湯灌を見ていないのにそんなに良く思ってくれていたことにびっくりしたり、嬉しく感じた。
- B: 母方の親戚で湯灌士になることを猛反対していた叔母が亡くなり、化粧を行った。遺族に感謝され、やっと認めてもらえたこと。
- C: 良いお見送りのときや、仲が良い家族、大家族は感動する。
- D: バタバタして大変な葬儀にも関わらず、お礼のお菓子を出してくれたりした時。
- E: 家族が参加したことで、あとから来た人に「私が化粧した」などと話していたとき。自然にかかわって、自分が「やってあげた」と思ってもらえたことが嬉しい。
- F: やりがいと同じ。心から言ってくれていると感じる言葉ももらったとき。特に別れ際は相手の本心が出ると思う。その場面での「ありがとう」にグッとくる。あまり化粧をしなかったという老婦人の湯灌時、少しだけ化粧を行った。湯灌中は笑って仕度をして和やかだったのに、車に乗り込んで去るときに娘が走って玄関まで出てきた。「最期に綺麗にお化粧をしてあげられて良かった。母の化粧した顔が見られて良かった」といって泣かれた。無理して言った言葉だとは感じなかった。終わってから色々考えた。
- G: 自分が介在しないで湯灌が成立したとき。若い母

を亡くしたケースで、まだ若い娘たちが、個人の両親・義両親の頼みでメイクを担当した。メイクをするような年齢ではなかったが、がやがやしなで行った。一番下の、まだ小学校1年生くらいの妹に対し、姉たちが「あんたもやってみ」と参加を促した。お絵かき感覚でやっていた。メイクとしては良くなかったかも知れないが、やっている時の娘や祖父母たちの顔が忘れられない。泣きつつ笑いつしながらメイクを見て、子供たちを褒めていた。とてもにぎやかな現場だった。今はメイクをするくらいの年頃だろうが、自分がお母さんの口紅を塗ったことを覚えているかなと思う。湯灌はその時限りの仕事ではなく、遺族には今後ずっと覚えている思い出になる。もし自分がメイクをしていたら、技量的には綺麗に出来ても意味はなかったのではと感じる。それまでは「綺麗にする」ことを気にしていたが、自分の技術を上げることはもちろん、それ以上に家族サポートが重要なことだと気づかされた、方向転換になったケース。一生忘れない現場。

親族から湯灌士について非難されていたというBさんは、Fさん・Gさんと同じように否定していた親戚の湯灌を行うことで、認めてもらえたという。「死体に接する仕事」という言葉だけでは理解することが難しく、偏見を生みやすい職種と考えられる。一方でこういった事例からは、実際に大切な人を綺麗にしてもらえることで、そういった偏見を変えられることがあると示している。Eさん、Gさんは「湯灌士ではなく、遺族自身が湯灌に関わる」ことが良かったと語った。遺族が携わる湯灌を通し、故人を綺麗にする技術面の向上だけでなく、「それ以上に家族サポートが重要な事だと気づかされた」(G)とも述べた。

挙げられた事例においても、自身の仕事が高く評価されたというような場合ではなく、遺族に寄り添うことができたと考えられるものをそれぞれ良かったケースとしている。遺族に「良かった」と感じてもらうために日頃技術を研鑽し、それが実を結んだ時は「良かった」と捉えられるが、出来なかった時に「つらさ」として感じられると考えられる。

10) 印象に残っている「良くなかった」ケース

これまでに担当してきたケースの中で、それぞれの主観で「良くなかった」と思うケースについて以下の回答を得た。

表 2-10 印象に残っている「良くなかった」ケース

- A：状態が最悪の故人。顔がパンパンで、初めて見た悪い状態の遺体だった。何からしたらいいのかあせり、職場へ電話をしたが何を言っているのかも分からず。身体にガスが溜まってパンパンだった。薬を注入したが、手が震えた。スタッフが助っ人に来てくれたときには放心状態。立会いはなかったが、怖い・何も出来ないと思ったとき、申し訳なくなった。
- B：防腐処置を始めた頃、失敗して腐敗させてしまった。責められなかったが、逆に辛かった。
- C：良い仕事ができなかったとき。防げたことをできなかったりしたとき。やりとりなどで遺族を傷つけたりはしていないはず。
- D：自分の力不足。もっとしたかったのに、という悔しさ。喋るのが得意なので、遺族へ伝えたいことがうまく言えないことも多々ある。言葉の選び方に悩む。
- E：新人の頃、仕事に自信を持たず、自分本位の行動で失敗した。約束より早い時間に訪問し、遺族に怒られた。故人を早く引き離そうとしていると思われてしまった。「どうしてこんなに早く来たのか」と言われた。遺族に寄り添えていなかったと感じる。
- F：自分が、故人の身体の状態を見落として、翌日大きく変化してしまったとき。前日にも傾向はあったはずなのに、見逃した。注意することができなかったが、後悔しても遅い。もしも変化がわかっていたら、一言家族に可能性を伝えておけば驚きやショックも少なく済んだろうが、何も言えず悪い状態になってしまったら家族はとてもしびりする。
- G：見られるような処置にしてあげられなかったとき。何とかして、と言われてもなにもできなかったとき。一晩中ストープの上に顔が載っていて、何もかも溶けてしまった顔に対し「顔を描いてくれ」と頼まれたが、できなかった。ほかにも数え切れないほどある。

「つらいこと」と共通する部分が多く、「自身の力不足」が遺族を哀しませたと感じているケースが挙げられた。Aさんは、初めて状態が悪い遺体を目にした時の思いを率直に「怖い・何も出来ないと思った」とし、そのことが遺族や故人に対し「申し訳なく」思えたと語った。Bさん、Cさん、Fさんは、遺体の変化を見落としてしまったケースを挙げた。Fさんの「一言家族に（変化の可能性を）伝えておけば」にあるように、専門家の処置を受けた後に予期せぬ遺体の状態悪化が起きてしまうことは、遺族に「驚きやショック」を与えかねないという。また、そういった失敗に対し、遺族から責められないことが「逆に辛かった」(B)という思いもあった。Eさんは、現場

に早く到着したことで「故人を早く引き離そうとしている」と思われてしまったという。葬儀や別れの場であるからこそその遺族の思いが表れていると考えられる。「何もできなかった」時としてGさんは、顔が溶けてしまった遺体の修復のケースを語った。

「できなかったこと」にもそれぞれ、遺体の状態から「不可能」であるものから、自身の精神的に「難しい」もの、また「見落としてしまった」ことなどがあると分かった。故人を綺麗にすることができなかったことへの悔しさや悲しみと、遺族への申し訳無さといった思いが表出された。

11) 他の湯灌士に聞きたいこと・知りたいこと

A社以外の湯灌士に聞いてみたいことや、他の湯灌士に関してどのようなことを知りたいかについて、以下の回答を得た。

表 2-11 他の湯灌士や納棺業者について聞きたいこと・知りたいこと

- A：自分が疑問に思ったことはパートナーに聞いてるので、今のところは特に無い。
- B：スタッフの教育方法。
- C：仕事については数人だけ接したことがあるものの、あとは知らない。テレビに出ている湯灌士の人たちの話を聞いてみたい。
- D：ご遺体勉強会などがあれば行きたいと思う。聞きたいことは特にない。返ってくる答えが予測できるため。
- E：どんな風に業務を行っているのか見てみたい。比べたいという訳ではなく、自分たちのやり方が100%正解だと思っていないので、遺体修復の場を見て吸収できることはしたいし、考えるきっかけにしたい。
- F：娘が他の湯灌サービス会社で働いているので何ともいえない。当社が一番だとは考えていないが、単純に他社がどんなやり方をしているのか見てみたい。
- G：連携して、業界全体のレベルを上げたい。閉鎖的だから自分のところのやり方などを外に発信しない。業界全体を引き上げるような団体を作りたい。共有して連携したい。そうすることで差別、偏見が無くなっていくのでは。差別や偏見がなくなれば、仕事のなり手も増えると思う。

Aさんは仕事仲間との関わりの満足感を示し、「特に無い」と答え、Dさんは「返ってくる答えが予測できる」から「特に無い」とした。Eさん、Fさんは「どんなやり方をしているか」と、

湯灌や納棺の方法・手順について知りたいことを述べた。

湯灌士同士のネットワークや協会は一部地域を除きほぼ無い現状の中、横のつながりを持ち業界を良くしていきたいという思いが語られた。実際、「湯灌サービス」の定義も曖昧で、シャワー入浴、湯船に入れての洗体などの形式の違い、遺族が湯灌を見学する・しないの選択の余地の有無の違いなど、様々なものがある。Gさんからは、そうした各個で行っているサービスを共有することが、差別や偏見の払拭の一助になるという考えも語られた。

12) エンバーミングについての考え

湯灌とは異なる遺体のお見送りであるエンバーミングを、湯灌士がそれぞれどのように捉えているのかについて、以下の回答を得た。

表 2-12 エンバーミングについての考え

- A: 高額。防腐剤注入のイメージ。
- B: 必要な人に施されるなら良いこと。日本のエンバーミングはそういう意図でなく、不必要な人にも勧めてやっているのはどうかと思う。一方で湯灌も、不必要な人にも行っている部分があるのは同じだと感じてもある。
- C: 一度見学したことがある。数は少ないが、エンバーミングされた遺体の納棺も行ったことがある。あまりいいイメージがない。やっている様子がえぐい。肌がゴムのような質感になる。ドライアイスで当てなくても大丈夫にはなるが、触ると感触が違う。見掛けは綺麗だが、触れたいと思う日本人の思いとは違う気がする。方法としては否定はしない。海外で亡くなった場合等必要な例があるとも思う。
- D: エンバーミングについては、湯灌などを知る前から知っていた。日本での需要は少ないと感じる。必要なケース以外でのエンバーミングは不要だと思う。日本では特に。
- E: 1回だけしかエンバーミングされた遺体は見えない。肌の質感が違う、人工的だと感じた。エンバーミングした人の話も聞いたことがある。「綺麗だった」とは言うが、質感をどう思ったかなどを知りたい。エンバーミングの良い点、悪い点を遺族に聞きたい。
- F: 湯灌とは別物だと考えている。需要もあるし、必要だと思う人がすればいいと思う。否定も批判もしない。湯灌とは別の送り方だと思う。まだエンバーミングした人と接したことがないから何ともいえない。
- G: 必要な遺体にとっては大変有効な処置だと思うが、日本の現状の葬儀・火葬の流れでは必要とされ

る状態ではないのが大多数にもかかわらず、葬儀社の利益追求のためエンバーミングを施行されているという残念な状況だと認識している。

Cさん、Eさんは「肌の質感が違う」ことを感想に挙げた。Cさんは、「ゴムのような質感」になることが、「触れたいと思う日本人の思い」に添うものなのかと疑問を呈した。しかしながら、どのスタッフもエンバーミング自体を否定したり、批判する考えはなかった。方法や肌質以前に、「不必要な人にも勧めてやっている」(B)、「必要なケース以外では不要」(D)、「利益追求のため施行されている」(G)といった、提供段階の問題があることを懸念していた。Bさんは「不必要な人に行っている」点は「湯灌と同じ」とも語った。

エンバーミングはまだ浸透している技術とはいええず、課題や問題も少なくないと思われる。また、湯灌に比べ高額であることや、薬剤の注入などを嫌う遺族もいる。「湯灌とは別の送り方だと思う」(F)との言葉もある通り、それぞれのメリットやデメリット、それぞれの処置を受けた遺族の心情などを今後明らかにすることが求められる。

13) 葬儀業界の課題

葬儀業界全体にはどのような課題があると感じ

表 2-13 葬儀業界の課題

- A: 宗教理解への知識不足。今は家族に確認することもあるが、仏壇も自由になってきているから(宗派などが)判断できなくなっている。仮に家族が間違ったことを言っても否定はしないし、家族に任せている。聞かれたら答えるようにしているが、葬儀会館のスタッフによって言うことが異なるので臨機応変に対応している。
- B: 遺体に関する知識と理解の不足。人としての尊厳が守りきれっていないと感じる。お金が無く、仕方がなかったとしてもすぐに火葬を受け入れるなど。故人を敬うことについて、葬儀屋が説いてくれたらと思う。
- C: 良くも悪くも多様化している。型にはまった葬儀が悪いわけではないと思う。考える余裕の無いとき、決まっていることの安心感もあると思う。一方で、噂が一人歩きし、葬儀に対し「ぼったくり」のイメージが強く疑心暗鬼になっている家族もいる。遺体保全のドライアイス代もけちろうとしてしま

う。消費者と業者の知識のミスマッチがある。「終活」で意識の高まりがあるので、今後はいい意味で理解が深まると思う。大手企業が葬儀の窓口を設けるようになってきたが、紹介する業者がピンキリなもの気がかり。

- D：叔母・叔父を亡くした時に当社を呼んで、見送ったが、葬儀業者の遺体への取り扱いに引っかかりがあった。葬儀屋でありながら遺体に触れない人もいて、疑問に感じる。葬儀屋のそのような様子を見ていたため心配で、故人の傍を離れられなかった。葬儀社ももっと遺体に優しく接して欲しい。やりたくない仕事なら辞めればいいのに、と思うこともある。
- E：先のことを考えると、葬儀の多様化・ニーズの変化に対応していくと思うが、家族への寄り添い方を全体で支えられる動きになればと思う。ドライな人が増えていて、それができないような気もする。業界自体がなくなることは無いが、湯灌・納棺の人材確保が心配。
- F：葬儀の流れや種類の変化が起きている。サービス業として客のニーズにどうこたえるか考えながら動いていると思う。昔では考えられなかった「家族葬」など。
- G：サービスのレベルアップ。葬儀のあり方への再考。お通夜無しのプラン等、葬儀社が単純に葬儀代金を見た目で安く感じさせるために考えたことで、家族も葬送について間違った方向へ流れていないか？ 家族葬という言葉が先行し、ねじまげられることで、本当にお別れをしたい人の機会を無くしてしまっていないか？

ているかについて、以下の回答を得た。

葬儀社に対し、「宗教理解への知識不足」(A)、「遺体に関する知識と理解の不足」(B)、「もっと遺体に優しく接して欲しい」(D)などの問題が提起された。また昨今の葬儀の多様化についても注目されており、どのように対応していくかということが課題として述べられている。「葬儀代金を安く感じさせるために考えたこと」が「本当にお別れをしたい人の機会をなくしてしまっていないか」とGさんは省略化される葬送を問いなおしている。Cさんは、噂の一人歩きが葬儀代金の「ぼったくり」を過剰に警戒する遺族を作り、遺体に必要な処置まで省かれようとしていることを懸念していた。

葬儀形態が変化していく中、葬儀社も知識の幅を広げ、情報をより発信していくことが必要で、また顧客側も、情報を集めて葬儀について考えることが求められてくるのではないだろうか。

14) 湯灌業界の課題

湯灌業界にはどのような課題があると感じているかについて、以下の回答を得た。

表 2-14 湯灌業界の課題

- A：ほかの会社は「うちがうち、よそはよそ」という感じがする。やり方や技術をほかに見せないのも、相互での交流が必要では。
- B：資格が無いこと。誰でも名乗ってしまう現状。資格化が必要なのでは。
- C：相互理解があればいいと思うが、難しい。それぞれの会社が、「一番」で「十分」と思っているのでは。当社から外へ知識や技術を出すことで、話せるようになればと思う。反対に、そうすることによって周囲から色々叩かれる危険性もあると思う。
- D：入社当時からブランクを挟み、技術の向上を感じた。現状で満足せず、「次はもっと」という姿勢でいる。他社については、遺体の扱いをもっと優しく、と思うことがある。他社の湯灌士は、「～できない」といつてやらないこともあった。何のために仕事をしているのかと感じることも。
- E：同業他社と情報交換がしたい。サービス提供は会社ごとの特色があつていいと思う。資格制度があるといとも思う。自分の技術のランクが分かれば向上心も生まれ、自信も付くし誇りも生まれる。日陰的な、薄暗い職と思われているので、イメージが変わればいい。
- F：根本的には前問と同じ。変化はしてきたが、基本は1つ、お客様のことを考えること。会社の色や考え方のずれはそれぞれにあると思うが、当社の色に共感できたから今ここにいる。
- G：人手不足（なりたいたいと思える職業でないところが大きな問題点）、業者間の連携意識が育っていない（知識・技術の向上に向けての努力が足りない）こと。

既に述べられたが、湯灌士同士の繋がりが弱いことが課題として挙げられた。「相互での交流」(A)、「相互理解」(C)、「情報交換」(E)などを通し、サービスの均一化というよりは各社・各湯灌士のスキルアップや連携意識による業界の強化が求められていると考えられる。また、「資格化が必要なのでは」(B)、「資格制度があるといい」(E)など、湯灌士の資格制度化も挙げられた。資格があることで、Eさんは向上心や誇りが生まれるのではと考えている。Eさん、Gさんの語りからは、仕事への誇りは、「日陰的な、薄暗い職」と思われている湯灌士の現状を脱し、なりたいたいと思える職になることで人手不足の解消に繋がるのではないかという思いを持っていた。

職業意識やサービス内容の上下幅が大きくなってしまっている湯灌業界の現状から、資格化や業務内容の周知などの柱を持たせることが、現状打破の可能性を持っていると示唆された。

IV まとめ

遺族は、湯灌を「遺体を綺麗にするサービス」という点については了解の上で申し込みをしているが、「好きな衣服を着せられる」とか「メイクで整えてもらえる」という点まで把握していないことが少なくない。また、「大切な家族」である一方、「遺体」でもある故人に対し、「触ってもいいですか」という問いかけもある。緩やかに病状が変化して死に向かう場合でも、突然の死であっても、死というのは予測が出来ないものであり、準備が難しい部分が多い。死んでしまうことで、家族との距離が遠くなったり、「していいこと」「してはいけないこと」「これからしてもらうこと」が一体何なのか、きちんと理解出来ていないのは珍しいことではない。死について語ること、死後について考えることのタブーが薄らいでいる昨今だからこそ、もっと「湯灌／納棺とは何か」を広報していくことが必要なのではないだろうか。またそれを通し、葬祭業者・一般市民のそれぞれから葬儀のあり方を見つめなおしたり、今後について考えていくことが求められていくのではないだろうか。

V 研究の限界

人の死は予定されるものでも予測しうるものでもなく、そのため湯灌士の仕事も日ごとにスケジュールが大きく異なり、プライバシーの保てる個室でそれぞれに時間を掛けてインタビューを行う

ことが出来なかった。また、同日中にインタビューを終えることもあれば、数回にまたがって尋ねる必要のあることもしばしばあった。そのような手続き面での不備があることから、今後より厳格に手順を踏んだ上で時間を掛け、詳細にインタビューを行う必要がある。また、対象施設が1施設のみであるため、より多くの湯灌士への調査を重ね、検証をしていきたい。

【引用文献】

- 1) 新谷尚紀, 関沢まゆみ編 (2005): 民俗小事典 死と葬送, 吉川弘文館, 377-378.
- 2) 内藤理恵子 (2013): 現代日本の葬送文化, 岩田書院, 35.
- 3) 新谷尚紀, 関沢まゆみ編 (2005): 民俗小事典 死と葬送, 吉川弘文館, 379-380.
- 4) ユーキャン新語・流行語大賞全授賞記録 (<http://singo.jiyu.co.jp/>), 2014年11月20日アクセス
- 5) 島蘭進 (2012): 日本人の死生観を読む 明治武士道から「おくりびと」へ, 朝日新聞出版, 40.
- 6) CiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>), 2014年11月18日アクセス
- 7) 新谷尚紀, 関沢まゆみ編 (2005): 民俗小事典 死と葬送, 吉川弘文館, 60.
- 8) 同上, 40.
- 9) 宇佐和通 (2004): THE 都市伝説, 新紀元社, 138-140.

【参考文献】

- 石丸昌彦 (2014): 死生学入門, 一般財団法人 放送大学教育振興会.
- 熊田紺也 (2006): 死体とご遺体 夫婦湯灌師と4000体の出会い, 平凡社.
- 松尾剛次 (2011): 葬式仏教の誕生 中世の仏教革命, 平凡社.
- 森謙二 (1993): 墓と葬送の社会史, 講談社.

An Investigation of Funeral Staff who Wash the Bodies of the Deceased

Ayaka Nagayama*

ABSTRACT

Recently, in Japan, there is an industry of funeral service providers that offer support by carrying out various funeral rites. Among them are experts who wash the body of the deceased in a process called *yukan*. This study presents interviews with professionals involved in *yukan* and a consideration of Japanese funerals. Seven people participated in the interviews, and the average age was 40.7 years old. They refer to the “thank you” they receive from the bereaved family, stating that it is rewarding work. On the other hand, they feel powerless when it is not possible to comfort the grief of bereaved. We look at cases from their experiences for an opportunity to reconsider the nature of funerals in Japan.

Key words : funeral, grief care, funeral director

* 2nd Year Master’s Student, Graduate School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University